

作家の肖像

第5回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



撮影 藤森武

1909-1990 土門 拳

どもん・けん
1909年山形県酒田市生まれ。7歳で東京へ移る。24歳のときに母親の勧めで上野の写真館の門生となる。営業写真に疑問を抱き、写真の理論と歴史を独学。報道写真家を志し、「風貌」「ヒロシマ」「筑豊の子どもたち」「古寺巡礼」などの作品を発表し、大きな反響を呼ぶ。生涯を通じて寺院や仏像など日本の伝統文化の撮影をし、脳出血で倒れた後も車椅子で撮影を続けた。1990年、80歳で死去。

時代と向き合った写真家

土門拳は1909(明治42)年生まれ。関東大震災も戦争も経験し、激動の時代を生きた写真家です。彼は、ほぼ独学で写真を学び、報道写真家を志しますが、「時代を撮る」ということに、先天的な才能のあった人だと思います。

彼と同時代を生きた写真家に、木村伊兵衛がいます。二人はまさに対照的で、木村が叙情的に写真を撮るのに対し、土門はその時代の構造までガシッと撮ろうとする。だから、土門の写真は、いつも野太くて、泥くさい。しかし、それは鍛錬のうえに生み出されたものであって、決して野暮ったいわけではありません。漆黒の闇の中で「底光り」しているような、深く強烈な印象を、私たちに与えます。

名文家・土門拳

6年ほど前、私は『風貌・私の美学』という、土門のエッセイ集の編集を務めました。改めて土門が書いた多くの文章を読んだのですが、実にすばらしく、すっかり虜になってしまいました。彼の文章は、彼の写真を見たときに受ける印象と、よく似ています。実直で少し強引、そして強い説得力があります。

この本には、土門が画家・梅原龍三郎(※)を怒らせた話が掲載されています。何度も執拗に写真を撮り続ける土門に、梅原がついにしびれを切らし、腰かけていた藤椅子を床に叩きつけたという話です。それで二人の仲が決裂したのかというと、そうではなく、その何年後かに土門はお詫びのため、再び梅原のもとを訪

れ、和解します。土門の写真に対する執念、そして人間くささがわかるエピソードではないでしょうか。

写真の鬼

土門は「写真の鬼」と呼ばれていました。梅原とのエピソードからもわかるように、写真を撮ることに對して、すさまじい執念があり、それを人は「鬼」にたとえたのでしょう。

私は、優れた写真家というのは、「対象から招かれる」ものだと思います。例えば土門の場合だと、たまたま訪れた広島から強烈に「撮ってくれ」と招かれ、それがのちに「ヒロシマ」という作品につながる。彼自身も「使命感みたいなものに駆りたてられて、憑かれたように広島通いすることになった」と述べています。「筑豊の子どもたち」「古寺巡礼」などの作品もまた、同じように対象から招かれた結果、生まれたのではないのでしょうか。

土門は脳出血に倒れ、59歳で車椅子の生活となります。しかし、弟子に車椅子を引かせ、時には弟子に背負ってもらいながら、写真を撮り続けました。入院しても、病床でカメラを手にしていたそうです。彼は死ぬまで「写真の鬼」であり続けたのです。(談)

※ 梅原龍三郎(1888-1986)
洋画家。京都府生まれ。浅井忠に師事し、渡仏後、ルノワールに師事。日本洋画界の巨匠と仰がれた。

酒井 忠康
さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



上/しんこ細工 1954年
土門は下町の子どもたちを愛し、
生き生きした姿を数多く捉えた。

左下/室生寺 雪の五重塔全景 1978年
30歳で訪れて以来、数えきれないほど室生寺に通い、
40年目にして初めて雪の室生寺を撮影した。

右下/梅原龍三郎 1941年
撮影をねばり、梅原を激怒させたというエピソードが有名。
その後は、親交を結んだ。(すべて土門拳記念館蔵)